

平成28年4月30日(土)

老球の細道231

4月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今年も無事桜が見れたと喜んでいたら、順調に回復してきた体調がまた元の状態に悪化してきた。九州熊本では何の前触れもなく突然の大地震。今の私が熊本にいたら生きていけないだろう。毎日テレビで熊本の様子を見ながら、健康と普通の日常生活がいかに大切であるか改めて感じさせられた4月であった。東日本大震災の経験があるからなおさら。

1・読書から

◆「世界で戦えるプレーヤーを育てるためには、世界の基準をコーチが持つこと。基本練習のなかにも世界基準のクオリティを求める」〈日本体育協会『スポーツジャパン』〉

今が二流、三流の実力であっても、子供たちの能力はいつ、どこで大ブレイクするか神のみぞ知る。常に世界基準を持つために、私の場合はNBAプレイの中に毎日探している。

◆「普通のチームがなんとなく過ごしている時間の中にも、あらゆる練習の可能性を組み込んだというところが違う。選手の上達は、自分の全生活の中に、どれだけ多くの時間バスケットを真剣に投入したかによって決定する。高まる情熱は努力を楽しむに使う」

〈梅村清弘・小林平八著『コーチの社会学』〉

1日24時間は平等であるが、その使い方は不平等である。バスケットボールを愛する選手には、練習する場所、時間、24時間、あらゆることに転がっている。

2・新聞等のコラムから

◆「スポーツ選手だから正しく振る舞うのではない。社会で暮らす人間はだれであれ、ルールを守らなければならない。スポーツの高潔性が語られる。スポーツの価値を再確認することは大切だが、その言葉には『スポーツにかかわる人間は普通の人たちとは違う』という響きもひそんでいないだろうか。社会は規範のなかで努力する人間の営みを礎としている。その原則から超越した『特別な存在』はありえない」〈朝日新聞・社説〉

大会で優勝したり、マスコミに取り上げられると、とたんに勘違いする選手、コーチがいる。自信過剰になったら過去の失敗を思い出せ。偉大さにうっとりしたら屈辱の時代を思い出せ。自分を全能だと感じたら星をみよ。たかがスポーツ思い上がってはいけない。

◆「生きる意味ってなんだろう？数年前、旅先のプラハでクラシックのコンサートに立ち寄ったことがある。地元の学生たちによる小さな催しだったのだが、モーツァルトの曲が本当に本当に美しく、わたしは、唐突に『生きる意味』ではなく『死ぬ意味』がわかった、と感じた。こんなにも美しいものに別れを告げることが死なのだ、と思うと泣けてきて、しくしく泣きながら聴いた」〈朝日新聞コラム・益田ミリ〉

バスケットボールに別れを告げるとき、私の魂は死んだも同然となるだろう。今はバスケットボールを子どもたちに指導させていただいて「生きる」喜びをもらっている。

◆「尊敬する人は心の中では高橋尚子さんだったんですけど、言えなかった。言ってしまうと、その人を超えられないと思ったから。でも、最後のレースとなった名古屋ウイメンズを走り終わって言えた」〈朝日新聞・女子マラソン金メダリスト・野口みずき引退会見〉

箱根駅伝のレベルで勘違いしている日本の長距離ランナーが多い中、マラソンに命をかけた勝負師の凄い言葉である。私も郷ひろみ、三浦雄一郎を超えられないかもしれない。